

令和4年度宮城県芸術選奨及び同新人賞受賞者一覧表

(別紙1/2)


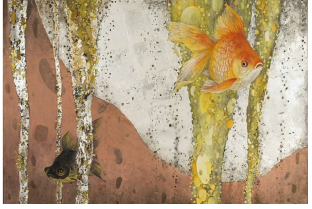
部門順・敬称略

【芸術選奨】

受賞者 部門	受賞理由(概要)	主な作品等
<p>森 真澄 (もり ますみ・72歳) 美術(洋画)部門</p> 	<p>昭和24年生まれ。 大学卒業後、一貫して抽象画を手掛け、これまで河北美術展や宮城県芸術祭で入賞を重ねるほか、新現美術協会展等に精力的に作品を発表してきた。 旅をしながらその土地の歴史や風土から着想を得た作品を多く制作しており、色彩豊かでエネルギッシュな作品が高い評価を得ている画家である。 令和3年度に東京都美術館で開催されたモダンアート展では、記憶が薄れていくこれまでの旅の経験と自身の心境を表現した作品「忘れそうな場」を出品したほか、宮城県芸術祭や新現美術協会展にも継続的に出品した。 作品制作を続ける傍ら、長年の間、宮城県芸術協会運営委員としても活動しており、その企画力や豊かな発想により県内の芸術教育活動にこれからも大きな影響を与えることが期待される画家である。</p>	 <p>「忘れそうな場」</p>
<p>秋 亜綺羅 (あき あきら・71歳) 文芸部門</p> 	<p>昭和26年生まれ。 学生時代よりその才能を寺山修司に見いだされ、文芸誌に詩作が掲載されるなど早くから注目されてきた。長年の間、朗読による文芸表現を展開し、詩作に留まらない幅広い領域で活動する詩人である。平成24年に刊行した第2詩集「透明海岸から鳥の島まで」で、第22回丸山豊記念現代詩賞を受賞。令和元年にあきは詩書工房を設立し、翌年にこれまで発行を続けていた季刊個人誌をリニューアルした月刊雑誌「ココア共和国」を創刊。投稿詩を対象とした3種類の公募賞を創設し、インターネット世代の若者からも強く支持されている。 令和3年度は詩集「十二歳の少年は十七歳になった」を刊行し、日常や現実との関わりを自在に切り取る言葉の柔軟性や抑制の利いた抒情性が、高く評価された。 これからはしなやかな言葉と新鮮な切り口を持ちながら、多方面での活躍により、詩が持つ可能性を拡大する挑戦が期待される。</p>	  <p>(左)詩集「十二歳の少年は十七歳になった」、(右)月刊「ココア共和国」(2022年4月号)</p>
<p>石沢 麻依 (いしざわ まい・42歳) 文芸部門</p> 	<p>昭和55年生まれ。 ドイツ在住。震災を題材に執筆した「貝に続く場所にて」で、令和3年5月に第64回群像新人文学賞、7月に第165回芥川龍之介賞を受賞した。豊かな比喩を持つ修辭的な文体により、過去と現在、現実と幻想を行き交う文芸表現は文壇でも高い評価を得ている。同作を発表後に始まった河北新報での連載「記憶の素描」が好評を博しているほか、エッセイ「きなり雪の書」(令和3年8月)、「ドストエフスキーの月と蛾」(同11月)などを次々に発表し、精力的に執筆活動を継続している。令和4年4月には第2作「月の三相」を発表した。 大学での研究が今後の創作活動においても大きな強みとなることが期待され、その成果は「貝に続く場所にて」で試みられた独自の世界観を描き出す表現力に活かされていくと思われる。現役で活躍する若手小説家のロールモデルとして、後進の作家たちに大きな影響を与える作家に成長していくことを期待したい。</p>	  <p>(左)「貝に続く場所にて」 (右)「月の三相」</p>
<p>松崎 太郎 (まつざき たろう・57歳) 演劇部門</p> 	<p>昭和40年生まれ。 地元仙台に密着し、「十月劇場」等での活動を通じて、アングラ劇を中心に客席と一体となることを意識した濃密な演劇を展開してきた、既成のメソッドに捉われない変幻自在な演技で観客を魅了する俳優である。また、同時に舞台照明家としての顔を持ち、その演出意図と演技に敏感な照明設計は、「演技のわかる照明」として、高校生から中堅の劇団まで様々な舞台上で強く支持されている。俳優と照明の双方に造詣が深い貴重な経験を生かし、後進の育成にも尽力している。 令和3年度は、俳優として「スウィング・アウト・ペアレツツ」(8月)や「あらわれればきじょう」(11月)等に出演し、舞台照明家としては日英共同制作舞台「炎:Hono」など多数の演劇公演を裏方として支えた。 これからは俳優として出演を重ね、演劇の魅力を伝えるとともに、照明の技術や感覚を多くの人に広めることが期待される。</p>	 <p>「今は昔、栄養映画館」より (左が本人)</p>

年齢は令和4年11月1日現在の年齢です。

【芸術選奨新人賞】

受賞者 部門	受賞理由(概要)	主な作品
<p>酒井 美雪 (さかい みゆき・67歳) 美術(日本画)部門</p> 	<p>昭和30年生まれ。 平成26年の河北美術展で新人奨励賞を受賞して以降、河北美術展をはじめとして、塩竈市美術展や新日春展で入賞し、優秀な成績を取ってきた。平成27年の河北美術展の出品作「時の水音」では、水から想起される時の流れや命の循環をテーマに自身の記憶を織り交ぜた作品で同展の河北賞を受賞した。 令和3年度は「夜明けの子」を発表し、塩竈市美術展において確かな視点と独自性のある印象的な作品として高く評価され、塩竈市教育委員会教育長賞を受賞した。 精力的に創作活動を続ける傍ら、大学卒業以後長年にわたり子供たちを対象とした絵画教室を運営し、後進の育成に大きく貢献するなど、今後も県内の日本画の発展に大いに寄与することが期待される作家である。</p>	 <p>「時の水音」</p>

受賞者 部門	受賞理由(概要)	主な作品等
<p>佐々 瞬 (ささ しゅん・36歳) 芸術(彫刻)部門</p> 	<p>昭和61年生まれ。 大学在学時より作品発表を行い、戦争の記憶や土地の歴史などをテーマにフィールドワーク、映像、写真、彫刻、パフォーマンス、ドローイングなど、様々なメディアを複合的に扱う美術家である。その斬新なアプローチによるインスタレーション表現により、全国的に注目を集めてきた。近年仙台に戻り、地元へ根ざした土地の歴史や震災を掘り下げた表現活動を、局地的で具体的な土地を舞台に展開している。 令和3年度に仙台メディアテークで開催された企画展「ナラティブの修復」では、公園整備のため住民が転出した地域を対象に、土地に対する人の記憶や愛着を想起させる作品を展開し、高い評価を得た。 柔軟な視点と豊かなイメージネーション、スケールの大きい横断的なバイタリティを背景に、地元の問題を広く開き、グローバル/ローカルの垣根を揺るがす作品を今後も生み出すことが期待される。</p>	 <p>「中古釣具店」</p>
<p>かんのさゆり (かんのさゆり) 芸術(写真)部門</p> 	<p>2000年代の早い時期から、デジタルカメラを使用した写真作品を制作している。「デジタル時代のリアリティ」を追求した作品により、第22回(平成16年)及び第27回(平成18年)の写真ひとつぼ展に入選。これらの作品では、都市と人間・空間に意識が向けられ、都市空間の奇妙さとそこに生きる人々を対象にした作品を継続的に発表してきた。令和2年度には塩竈市杉村惇美術館主催の「若手アーティスト支援プログラム Voyage」に選出され、企画展を成功させた。 令和3年度にGALVANIZEgally(石巻市)で発表した「New Standard Landscape」では、震災後に建てられた郊外の新築住宅や移転した宅地の戸建住宅に視線を向け、その空間の意味を解体し、再構築した確かな視線が高く評価された。 強固な熱意と明確な意識のもとにそこに立ち、これからも時代を鋭く捉え世界をイメージ化し続けていくことが期待される写真家である。</p>	 <p>「New Standard Landscape」</p>
<p>小野 綾子 (おの あやこ・40歳) 音楽部門</p> 	<p>昭和57年生まれ。 平成30年にヴィンチ国際バロックコンクール・ソロ部門及びアンサンブル部門にて1位受賞するなど国際的に活躍している古楽ソプラノ歌手である。 ミラノ国際博覧会、芸術音楽祭、ローマ・バロックフェスティバル等でソプラノソリストを務めるほか、ミラノ大聖堂をはじめとしたイタリア各地の教会でソリスト、アンサンブルを務める。また、自身が卒業したイタリア・ミラノ市立音楽院出身の3人の音楽家で結成した古楽アンサンブル「イル・メルロ」の主宰として、16世紀から18世紀のイタリア音楽を中心に県内外で幅広く公演を重ねている。 令和3年度は、個人として4月にハーブ奏者と、8月にチェンバロ奏者とのリサイタル公演を行ったほか、10月にはイル・メルロとしてプロデュースした「輝かしい17世紀ポーロニャの音楽」で日本を代表する古楽の歌手16名による共演を成功させた。 海外での活動と幅広い人脈を糧にし、インターナショナルな古楽ソプラノ歌手として、より一層幅広い取り組みが期待される声楽家である。</p>	 <p>「うるわしいマイラの瞳に」 (イル・メルロ主催公演)</p>
<p>阿部 裕恵 (あべ ひろえ・27歳) 舞踊部門</p> 	<p>平成7年生まれ。 4歳でバレエを始め、バレエ専門誌に取り上げられるなど早くからその才能は認められてきた。ジュニアコンクールで入賞を重ね、高校卒業後、新国立劇場バレエ研修所を経て、平成28年より牧阿佐美バレエ団に在籍。翌年には「ドン・キホーテ」で主役のキトリを演じるなど、着実にキャリアを重ねた。また、平成29年のオンステージ新聞にて「舞踊評論家が選ぶ2017年新人ベスト1」に選出された。 令和3年6月には「リーズの結婚〜ラ・フィュー・マル・ガルデ〜」でリーズ役を、8月には「白鳥の湖」でオデット・オディール役を務め、好評を博した。これまでの功績が認められ、令和4年には優れた業績を上げている若手芸術家へ贈られる中川鋭之助賞を受賞した。 公演を重ねながらも生まれ育った教室での発表会に参加し、地元を大切にしている姿勢が評価されている。今後も一層魅力的な舞踊家として成長すると同時に、親しみやすい舞台やワークショップを開催し、クラシックバレエの普及に貢献していくことが期待される。</p>	 <p>牧阿佐美バレエ団 「ドン・キホーテ」 主役 キトリ</p>
<p>スズキスズヒロ (すずきすずひろ・30歳) メディア芸術部門</p> 	<p>平成4年生まれ。 平成28年に短編作品「TRANSPOTTING」でデビュー。どこか懐かしい画風と温かみのある作品を描く漫画家である。令和2年度には仙台文学館の企画展「作家・編集者 佐々木俊郎 農村と都市 昭和モダンの中で」でイラストを担当し、その後、歌人の俵万智の原作を漫画化した「あつてなくなる」(俵万智×スズキスズヒロ)を発表するなど、デビューから短期間の間に活躍の場を広げてきた。 令和3年度はこれまで書き上げた6編を収録した作品集「空飛ぶくじら スズキスズヒロ作品集」が「人と人が紡ぎ出す忘れられない人生の1ページを書き出している」と高く評価され、第24回文化庁メディア芸術祭マンガ部門新人賞を受賞した。また、子育てをする父親を対象に発行された石巻市父子手帖に漫画を寄稿し、その親しみやすい画風は子育てにおける様々なシーンをイメージしやすいなど好評を博した。 仙台在住で活動を続けており、地元の文化事業やメディアでの活躍も期待される漫画家である。</p>	 <p>「空飛ぶくじら スズキスズヒロ作品集」 (イースト・プレス刊)</p>

年齢は令和4年11月1日現在の年齢です。